

## カンボジアにおける稲作生産の変遷

——特にアウタルキーを中心として——

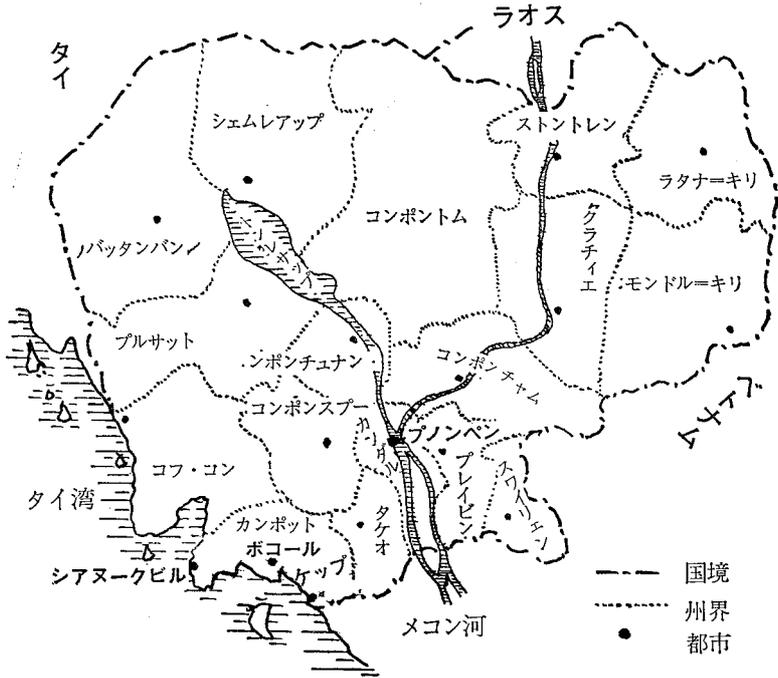
は し が き

太 田 晃 舜

カンボジア王国は、トンレサップ湖やメコン河の恩恵によって、広大な平野と肥沃な地味に恵まれているので、国民のほとんどが昔から肉体労働を根幹とする伝統的農業に従事している農業国で、土地生産の有無が、国家経済に大きな役割を果しているのである。

カンボジアの農産物は、特に自然条件（地形・土壤）に密接な関係を有して立地している。

一般に人口分布の偏在や食習慣の差異、地形・気候の特性による稲作生産の適否が稲作分布の偏在を生じ得ることは、単に国際的のみならず、同一国家の行政区分内においても、主食糧源の過不足に影響するところ大である。ここでは、歴史的な性格としての外力浸透がいまなお続き、動搖的性格をもつインドシナの一国、カンボジアにおける稲作の地域的生産量や人口分布との相関を通じ、各州別に比較し、主食糧源としての米の過不足の地域的差異を、その変遷とアウタルキーを通じて考察を試み、地域性の一端に触れたいと思う。



カンボジア王国の行政区分図

Country Survey Series, editor; Thomas Fitzsimmons: CAMBODIA, 1957  
 および外務省『カンボジア王国便覧』1961による。

### 一 地域概観

カンボジアの位置は北緯一〇〜一五度、東径一〇二〜一〇八度であり、面積は一八万一〇〇〇平方キロメートル（六万九〇〇〇平方マイル）。北海道の約二倍に相当する。長さ五六〇キロメートル、幅四四〇キロメートル、国境は二六〇〇キロメートル、その六分の五は地上国境である<sup>①</sup>。

行政区分では、以前（一九五七）まで、一四州（Khet）に分けられていたが、一九六一年以降は一七州に分けられている<sup>②</sup>。最近は一九州である。州は郡（Stok）および町村（Khum）に分けられ、そのほかプノンペン（Phnom-Penh）、シアヌークビル（Sihanouk-Ville）、ケップ（Kep）、ボコール（Bokor）の四自治市に分けられている。

増加した州は、セントレン州からラタナキリ、クラチイエ州からモンドルキリ、カンボット州からコフコンの各州が分離したものである。

地形<sup>⑧</sup>は平野が多く南西と東北に山地があり、メコン河流域と大湖沿岸の平野は肥沃であり広い盆地を形成している。最高はコンボンスプー州のプノンオーラルである。地形上カンボジアは五区に分けて考えられる。すなわち、クラバン山脈・丘陵地帯・中央平野・北部高原・東北周縁高原等である。

気候<sup>⑨</sup>はカンボジアほど季節風帯気候の特性を典型的に示すところは少ない。この平原でも雨季は五～一〇月の六カ月間、乾季は一～四月の六カ月間とはつきりしている。雨量も一般に雨季と乾季では格段の差がある。

農作は雨季におこなわれ、乾季はほとんど耕作されない。乾季になると雨がなく暑熱がはげしいので、農村は黄褐色に塗りつぶされ、ちょうど温帯地方の冬の景色をみるようである。植物は成長を停止して休眠の状態にはいり、家畜もやせほそってしまうのが一般的である。ことに三～五月間の暑さは、まったく酷熱で、屋内で三五度C、屋外で四五度Cをこすことは、さほどめずらしくない。月別平均気温<sup>⑩</sup>でも、四月が二九・七度（一九五一）で最高を示しており、日本の東京における八月より高いことがわかる。雨量は双方共九・一〇月に一番多く、二五〇ミリ以上になっているが、プノンペンの場合は、特に一月から四月の間において少なくなっていることから、その特色を認めることができる。

カンボジアは、古来より外力の浸透があり、西紀三～六世紀にインド文化が栄えて発展したが、西歴五五〇年ごろからカンブージャ（Kambuja）の攻撃を受け、それよりのちにクメール（Khmer）と称した。これは六～一二世紀に盛えたが、一二九六～一三〇七年のころタイとベトナムの挾撃を受け、結局タイの独壇場となった。しかし、一八

六七年ころのフランスの進出によりタイの勢力は排除されていた<sup>⑥</sup>。

第二次世界大戦には日本軍の占領下におかれ、戦後の解放運動など、常に政情の不安にさらされていた<sup>⑦</sup>。

カンボジアには、モンクメール人と呼ばれるカンボジア族やベトナム人、中国人、それらの混血や少数民族が住んでいる。

宗教は一三世紀ころまでヒンズー教と大乘仏教が栄えていたが、その後タイの侵略により小乗仏教と化し、現在これがカンボジア全国民の間に根強い勢力をもっている<sup>⑧</sup>。

## 二 稲作生産の地域的差異

### (一) 土地所有と稲作社会

カンボジアがフランスの保護国となるまでは、カンボジア王国の土地は、王の個人的所有地とされて譲渡を禁じられていた。農民達はただ占有権を有しているだけで、今日Aが耕作している土地も、Aが立退いたあとでは、明日は早くこれを占有したものの手に帰するというような状態であった。

フランス領となつて以後は、カンボジアにおいても、土地の私有権制度を確立する意図の下に、土地に関する古い制度を改変され、一八八四年、ノドロム王と交渉して、王の絶対的所有物として譲渡を禁じられていた全王国の土地を解放し、相互間の譲渡を認めさせることになった。そして、土地の占有権が誰の手にあるかが明瞭でない場合には、この土地は公有地となり、多くの競売に付せられることになっていた。外国人に対しては原則として土地所有権は認められていないが、ただアジア人およびフランスの同盟国としてヨーロッパ大戦に参加した国民に対しては例外

が設けられている。

すなわち地方の未開拓地の開拓を奨励するために、一定の条件を具備するものに対して、最高三〇〇ヘクタールまで無償払い下げが行なわれ、払い下げを受けた者はその払い下げ地の少なくとも五分の四を開発するまでは、他の土地の払い下げを申請することができないことになっており、五年の期間が経過して、占有者が実際にその土地を開拓したうえでなくては、確定的な土地所有権を認めないことになっている。換言すれば、それまでの間はただ暫定的な土地所有権が認められているにすぎないわけである<sup>⑧</sup>。

カンボジア農民の大部分は、五ヘクタール未満で、全農家の九〇パーセントは小土地所有者階級に属するといわれているが、地域的<sup>⑨</sup>にはカンボジアの中心的な米作地帯であるバツタンバン州やスワイリエン州およびプレイビン州などにおいては、大規模経営を行なっている農家も比較的多く見られ、他方メコン河流域の肥沃な商品作物栽培地帯に位置するコンポンチャム州などのような、経営面積こそ小さいが、集約的な農業経営によって、相当な収益をあげている人口稠密地帯もある。

しかし、一般的に見て、小土地所有者が多く、彼等は家族労働によって耕作される範囲内で一家の最低生活を維持すると共に、平年における租税被服費および祭典費などを支弁し得るに必要な米田の大きさを代表するのである。彼等の多くは土地・原始的なあばら屋・農舎・農具の外に、耕作用の水牛または牛を所有している。彼等は運転資本にことかき、耕作資本は主として粃をもつて代替される。耕牛をもたない時は、貸借料として労働日をもってこれに当てるのである。耕作資本は土地所有者(五〜五〇ヘクタール)、多くは地方の金融業者、村の名士または官公吏である。また、華僑は米の収買人でもあり、彼等などから借りる、現金の貸付はおおむね月一〇パーセントの高利である。

この国における土地は、小作人または分益小作人によって耕作されることはきわめて稀である。ときたま、小作関係の存在するところでも、小作地の面積は苗作米田で三〜四ヘクタール、浮米田で五〜六ヘクタールであり、小作料は金納の場合は地価の二〇〜三〇パーセント、物納の場合は収穫の二五〜三五パーセントで、比較的低率である。したがって、カンボジアの農民は、大部分が自作農とみてよい。だがそれでも農民の生活状態はきわめて低い。かつての中国の最低生活を営んでいた農民よりは低いかもしれない。肥料もやらなければ、農具の更新資本投下のごときも彼らにとってはおよびもつかない。

農民の貧困のよってくるところは、何によるのであろうか。ある人は、宗教に、ある人は、華僑の中間搾取に、または停滞的農業技術に原因を求めるとであろう。なるほど、今日カンボジアの農業生産力はきわめて低い、クメール時代の生産に比して大した変化はない<sup>⑩</sup>といわれているのである。もちろん、農民の生産意欲と勤勉性の欠如も考慮されよう。

#### (二) 稲作の生産

カンボジアの稲作は、まず、栽培の時期によって乾季稲と雨季稲に二大別できるが、それはさらに早稲 (Srauv Sral) と中稲 (Srauv Kandal) と晚稲 (Srauv thyon) の三種に分けられる。また、栽培条件によって、水田稲と浮稲 (Srauv wia) とに、品種によって糯とモチ米 (Srauv damneup) とにも分けられる。

情報省の発表によると、カンボジアの米田総面積は約一二〇万ヘクタール (一九五四) で、これはカンボジア総面積の七パーセント、全耕地の八〇パーセントにあたるという。

稲田の最適地は普通メコン河平野一帯のプレイビン州・タケオ州・カンダル州といわれているが、トンレサップ湖の西南部バタンバン州は稲田面積でも全国第一であり、農業経営や技術の進歩の面からいっても将来性がある、

いかなればカンボジアを代表する稲作地帯である。

農業省が一九五九年一月二日付で発表した一九五九—一九六〇年度、雨季稲に関する推定によれば、総栽培面積は一六一万二〇〇〇ヘクタールになっている。

浮稲地帯を除き、普通の水田地帯では五月になって雨が降りはじめるとすぐに苗代作りがはじめられ、つづいて播種する。一般に一ヘクタール当たりの苗をつくるのに六〇キロの種籾を使っている。一方水田の耕作・整地・畔作りは男の仕事であるが、八月から九月にかけて行なわれる田植作業は女の仕事となっている。収穫期は品種により、それぞれ異なるが、一〇月末から二月にかけて行なわれる。稲刈には鎌を用い、脱穀は牛に踏ませ、精白は精米所か自家で手すきにする。藁は稲塚にして牛の飼料にするか、そのまま田で焼いてしまう。

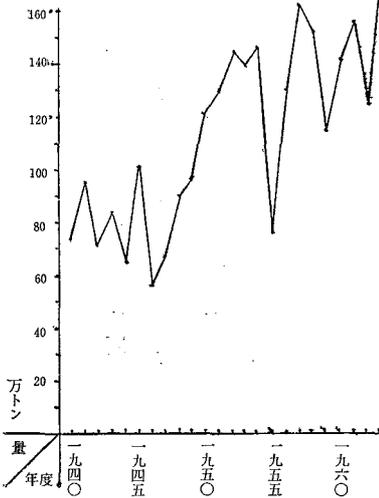
収量については、各種の統計数字があつて、どれが比較的正しいのか判別しがたいが、情報省の発表によると、一九三四年五〇万トン、五四年一四六万三〇〇〇トン、五五年七八万トン、五六年一一五万トン、五八年一五三万トンとなつており、国連統計資料より幾分少なくなつているが、その増減傾向は同様である。一九五五年度の大幅な減収は、田植前の雨の不足と、田植後の一時的洪水、さらにその後の干ばつという悪条件が重なつたためであつた<sup>⑧</sup>といわれるし、また、当時は盗賊のばっこ、政情不安などのため農民の米作意欲減退もたしかに影響したと思われる。

#### (四) 生産の推移と差異

米はカンボジア国民の主食であり、かつ輸出農産物の大宗として、農産物中第一の重要性を持つもので、最近の豊作年において、一五五万四〇〇〇トン（一九六一）の籾の生産高を記録し、最凶作年において七七万五〇〇〇トン（一九五五）の生産高が記録されているが、一九四〇年代から年度により生産高の増減をみながらも、年々籾生産高

は増加している。一九三六年を起点とした場合、年々その増加量は三万二四〇トンと計算されている。一九四六年を起点とした場合は、三万六二三〇トンとされ、その生産量の急上昇を認めることができる。しかしこの生産増も社会や政治的変動の影響が大きく現われている。

一九四一―二年には、第二次大戦で不安定な時期であったし、一九四一―五年まではバタンバン州などタイ国に割譲されていた時期であり、四四年頃は、雨不足の地域があり干ばつになったり、一時的出水で洪水地域があったりした。また、一九四五―六年には、日本軍の仏印処理、そしてノロドム・シアヌーク王がカンボジア王国の独立宣言をなすなど、政情不安であったことが籾生産の不安定性を物語っている。これより年ごとに生産は上昇して行ったが、一九五四―五年には籾の生産量は急減している。それは早ばつで凶作によることと、内戦<sup>⑧</sup>によるものである。すなわち、一九五四年七月二三日、ジュネーブ協定により、自由カンボジア運動の一切の敵対行動が停止され、カン



#### 籾生産量

出所：カンボジア農業局『カンボジアの農林畜産業』外務省、1963。  
『アジア経済』アジア経済研究所、1965.1. より太田作成。

ボジアの三分の一に当たる一〇万平方キロの地域が支配され、一四州中一一州に解放区を設けていた自由カンボジア政府軍も三〇日以内に武装を解かれ内戦は終わった。一九五五年選挙の結果人民社会党が圧勝し、国民議会の全議席を独占、王国の基礎が定まったことなどである。

その後ふたたび籾生産が回復したかにみえたが、一九五九年二月のサム・サリ前駐英大使らの

国家転覆計画の発覚、同年八月、国王夫妻の暗殺計画未遂爆弾事件が起り、タイ、ベトナム関係が悪化したり、その政情不安期と二度目の早ばつ時には籾の生産量も一時的に減少している。最後に一九六二年のメコン河の大洪水の時も同様である。しかし、全般的には、増加傾向にあることがわかる。

収穫面積が年々増加傾向にあることと、一般農民の関心が増産に向けられていることにより、籾の生産増加となつて現われた。

稲作技術は伝統的なやり方を踏襲しているに過ぎない。近時水利問題が取り上げられ、五カ年計画においても灌漑の改良が重視されているが、州によりその面積には著しい差があり、その完成により稲の栽培法も変る。経営面積の比較的大きいバツタンバン州においては、直播が主として行なわれ、経営面積の小さい他の諸州においては、主として移植栽培法が行なわれているが、もちろん部分的には、直播栽培も行なわれている。直播・移植いずれの場合においても、現在のところ、ほとんど無肥料で栽培<sup>⑥</sup>されている。そのうえ、粗放な栽培が多いため、一般に籾収量は一ヘクタール当たり一・〇五トン（全国平均）に過ぎない、肥沃地では二〜四トンの収量をあげているところもある。籾の州別ヘクタール当たり収量<sup>⑥</sup>についてみれば、一・六トン以上の州はバツタンバン、次いでプルサットである。意外に少ないのは東北部と西部の丘陵地域およびプノンペンから下流のメコン河流域であるが、ここは浮稲や減水季田の多い地域で、洪水などの河川水の影響の大きい地域であることを物語っている。一九六二年前一〇年間の単位収量の全国平均で最高は一・二六トン、最低は〇・六四トンであるが、全般的傾向としては、毎年〇・〇〇六九トン以上の割に増加しているとされる。

籾の州別生産量<sup>⑥</sup>を見ると、一九五三〜四年には二〇万トン以上の生産量のあるところは、やはりバツタンバン州

とプレイビン州とになっており、最も生産量の低い一万トン以下の州は、カンボジアの北東部セントレンとラタナキリ州となっている。前者は沖積土地帯で土壌が肥沃であり、移植一回雨季田地区であるためで、後者は中生層、古生層の丘陵地域が多いことを示し、これらは水田適地の良否を示すものである。

一九六六年度における州別の穀生産量で二〇万トン以上の州は五州にまで増加し、次いで一七万トン以上の州は三州に達し、一万トン以下の州は皆無となりその増加傾向を示している。

### 三 人口の地域的差異

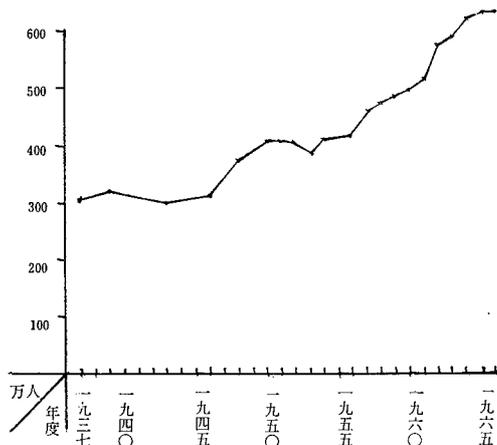
#### (一) 人口分布の推移

カンボジアの人口は、一九三七年には約三〇四万人であったのが、一九六六年には約六三二万人に達し、二倍以上に増加している。しかし、その中間ではやはり人口の増減が認められ、一九四三年頃は第二次大戦中であり、領土問題も関連し幾分人口の減少かあるいは横ばい状態であった。

一九四五年には、日本軍の仏印処理と、ノロドムシアヌーク王がカンボジアの独立を宣言した年であり、これを転機に幾分人口が漸増している。しかし一九五〇年頃からは、ふたたび人口漸減が現われた。これは、自由カンボジア解放運動などの、政情不安によるものと思われる。一九五六年頃よりふたたび人口は漸増<sup>⑥</sup>して今日に至っているのである。

一九五一年頃の戦後における人口増加期の全人口数は、約四〇七万人<sup>⑥</sup>に達している。

同年の平均人口密度<sup>⑥</sup>は一平方キロメートル二三人強で、最も稠密な所はプノンペンの一平方キロメートル七九〇



『世界統計年鑑』1952~1967年版、『世界人口年鑑』国際連合、1960より太田作成。

ている。この傾向は、五十二万人以上の人口をもつ州が一九六六年の州別人口分布図でも地域的に集中している傾向からも認めることができる。

一九六二年における総人口は、約五七四万人<sup>②</sup>に達し、平均人口密度は、一平方キロメートル三三一人となつてゐる。最も稠密な所は、やはりプノンペンで、一平方キロメートル八七七一人と、かなり高密度になっており、次いで一〇〇人以上に達している州は、カンダル、タケオ、プレイビンの三州で、メコン河下流の沖積地に集中している。最も少ない所は、モンドルキリ州の一人であり、ストントレン州では三・一人となっている。いずれもカンボジア東

九人に達していることであり、一〇〇人以上に達している所はカンダルとタケオの二州である。これと比較して、最も少ない地域はストントレン州の僅か二・二人であり、一〇〇人以下の州は四州にもおよんでおり、いずれも東北部丘陵地の特色を示している。

同年における主要都市人口<sup>③</sup>の合計が五二万九二二七人で、その内プノンペン市だけで、三六万三八〇〇人という実に多くの人口を占め、全都市人口の過半数以上に達して、ベトナムにおけるサイゴン市と同様な、インドシナ地域の一特色を示しているのである。

都市は、カンボジア国の南部地方でメコン河流域に多く発達し

北部の丘陵地である。しかし、同一州内においては河川流域に近い所はそれほどでもない。

### (⇒) 農 業 人 口

カンボジアの一九五九年における総人口は、約四八三万人となっているが、農業人口は、稲作従事者二七七万六〇〇〇人、五五万一五〇〇世帯、世帯当たり五・〇人その他の農業に従事する者五五万六〇〇〇人、一〇万八〇〇〇世帯、世帯当たり五・一人、合計三三三万人、六五万九五〇〇世帯と推算されている。これは全人口の六九パーセントに該当し、この外に漁夫八万二〇〇〇人（二・一パーセント）、一万六六〇〇世帯（二・一パーセント）、林業一万人（〇・三パーセント）、一三〇〇世帯（〇・三パーセント）を加えれば、広義の全農業人口は三四二万四〇〇〇人、六七万八四〇〇世帯に達し、実に全国人口の七一パーセントに該当する。

農村居住者でも商工業・公務・自由職業・その他と職種もあるが、その総数三九七万五〇〇〇人（農村居住人口）に対し、純農業人口（漁業・林業を含む）は、八六・一パーセントに該当する。なお、カンボジア王国では、一九六二年四月一七日より一五日間の予定で人口調査（センサス）を実施した。ちなみに、人口増加率をみると、年一パーセントであるといわれ、人口問題は存在していない。

わが国の農業人口が総人口の約三七パーセント（一九六〇）から二八・九パーセント（一九六六）に、また総就業人口に対する農業就業人口は、二九・九パーセントから二一・九パーセントに該当することを想うとき、カンボジアの農業人口のウエートはきわめて大きいといわなければならない。

## 四 稲作生産と人口との相関

カンボジアの農業人口は、総人口の約七一パーセントも占めており、農業がこの国の基盤をなしていると言える。米田は耕地面積の大部分を占め、米は農産物の大宗である関係からその生産量も多い。

一九六六年における粃米の生産量は、資料により多少異なるが、「アジアの動向」誌によれば、二七三万七三〇〇トンに達し、年々増加している。もちろん統計数値の不完全な点はあるが、大差がないため一応の傾向をつかむにはさしつかえない。

カンボジアは米の余剰国で、年々米を輸出しているが、国内全域に平均して生産されているものでなく、人口の偏在と粃生産の偏在によりその相関を考えた場合、かならずしも適正な分布を示していないのである。

ここに一人当たり一年に〇・一八トンの粃米を消費するものと仮定<sup>3)</sup>してみると、一九五六年の粃生産量は約一三〇万トン、粃米にして約六四パーセントに減少することになるから約八三万二〇〇〇トン、年間消費量は粃米約七八万四六二〇トんで、四万七三八〇トン程度余剰を示すことになる。もし一人当たり〇・一七五トン消費するとすれば、約七万トンの余剰ということになる。

地域別にみると、<sup>4)</sup> バッタバン州が八万トン以上の余剰を示し、不足の地域はセントレン（七三六〇トン）やシエムレアップ（六六〇〇トン）クラチエ（一万二五〇〇トン）の丘陵地域および人口の集中しているカンダル（九万〇一二〇トン）やコンポンチャム（五〇〇〇トン）およびカンポット（一万トン）の六州になっている。

一九六六年における粃生産量は、前述の通り二七三万七三〇〇トンで、これを粃米にすると、約一七五万一八七二



年までの州別の精米量と人口相関の推移をみてみよう。一九五六年の精米生産量が過去五年間のほぼ平均的精米生産量を示しているので、この年度を基準にし、人口も一九五六年の実際数をもって算定することにした。一九六六年は精米の生産量も、人口も、そのままの年度の統計である。

これによると、二点間の距離で、右に伸びている州は精米生産が急速に上昇したことを示し、バツタンバン州・シエムレアップ州・プレイビン州・タケオ州が顕著である。その距離が上に伸びている州は、人口の急速な伸長を示すもので、プノンペンを含むカンダル州とコンボンチャム州であり、メコン河流域地域に多くなっている、そして、いづれも精米の不足地域となって現われている。この州の外、四つの州、すなわちカンポット・シエムレアップ・クラティエ・ストントレン州は、一九五六年には不足の州であったが、余剰の州に転換したことが認められる。なお、人口は増加したが精米生産の減少を示している州は、カンダルで、これはノーマルではなく、メコン河周辺の洪水被害によることを示している。

一九五一年を基準とした籾生産の対人口増加率を一九六六年までの場合について分析してみた（籾生産増加率／人口増加率）、人口は一応漸増の傾向を示すが、籾生産量は年度差がはげしいため、基準年の生産量を五一年～五六年までの平均をとってみた。人口の同一年度の統計は、中間の年度において不明なところがあるため、平均をとらず、一九五一年と一九六六年度の実数から率を計算した。

これによると、籾の生産力の伸びが人口の伸びをどれ程上回ったか、具体的には自給主食にどれ程の余裕をもつようになつてきたかを知ることができる。指数一〇〇以下は二州で、一〇〇以上はその他の州全域である。指数五〇〇以上は自給主食に余裕が出て来たものとみられる。それは、一九五六年の統計では、いづれも不足地域であったもの

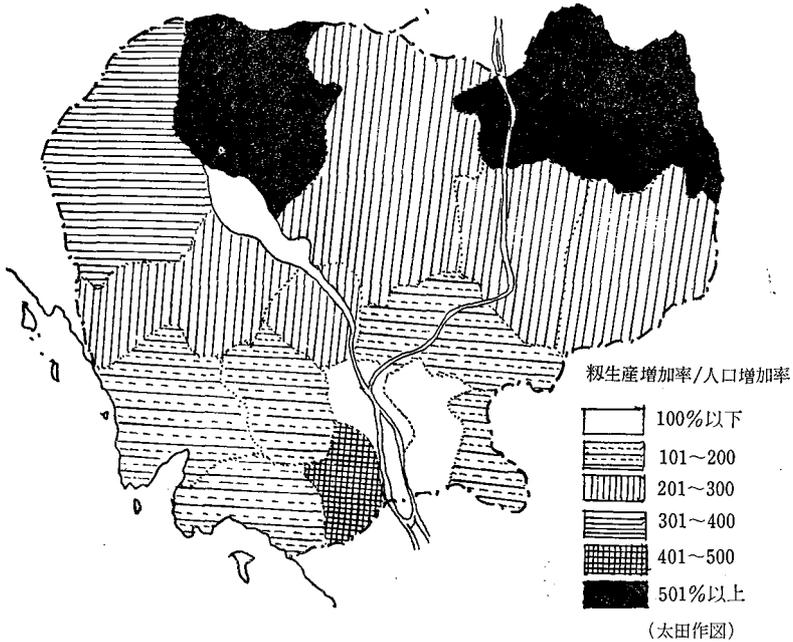


図 5 1951年を基準とした籾生産の対人口増加率

で、最近急速に籾生産の上昇した地域であること  
を物語っている。いずれも人口稀薄地域で明確に  
現われている。その他の地域は、すでに自給力の  
ある生産量の多い州であったため、それほど鋭敏  
に現われていない。

一般にカンボジアでは、平年作一三〇〜一四〇  
万トンと言われ、輸出余力も三〇万トンと言われ  
て来たが、細部は検討してみる必要がある。

また、国内消費は、種子・食糧・工業用などを  
含めて、一九五七年には約一二〇万トンといわ  
れ、国民一人当たり四八五グラムの消費量と見込  
まれている。それでも地域によって（ブノンペン  
・ストントレン・クラチイエ・コンポンチャム・  
カンダル）は恒常的食用米の不足をきたしている  
と称されている。しかし、小麦粉の輸入や他の農  
産物の生産量を考慮して、全体としては、平年作  
であるかぎり、毎年三〇万トン程度の余剰がなけ

ればならないという報告<sup>⑧</sup>もあり、前述の算定より幾分多くなっているが、それは小麦粉の輸入や、他の食糧作物を考慮したからに外ならないと思われる。

ちなみに、米および米製品の輸出高<sup>⑨</sup>をみると、一九四八年から一九六二年までの一五年間の輸出平均は一六万七四六九トンに達し、前述余剰分の半分程度の輸出量であるが、種粃や工業用消費を差し引けば当然であろう。しかし、年度が新しくなるにしたがって、輸出量も増加している傾向が認められる。その中間の年度において、輸出量増減の差がはなはだしいが、これも前述と同様に政情不安や凶作などの粃生産の影響差と大体一致した傾向を示していることがわかる。要するにカンボジアは、米の余剰国であるが、地域的には恒常的な精米不足の州もあることが認められ、それも時代が新しくなるにしたがって、不足の州の減少傾向を示していることがわかる。カンボジアにおける未開発地は国土の九〇パーセント<sup>⑩</sup>近くもあることを思えば、将来性ある地域の一つである。しかし、低地帯水田地域で、畑作や集落は自然堤防などの洪水時の水位以上の所に位置し、集約的農業を行なっている人口稠密地域は、今後もなお精米不足が続くであろう。

## む す び

カンボジアの地形は、平野が多く南西と東北に山地があり、メコン河流域と大湖沿岸の平野は肥沃であり、広い盆地を形成している。気候は、季節風帯気候の特性を典型的に示している。雨季は五―一〇月の六カ月間、乾季は一―四月の六カ月間と明確である。農作は雨季におこなわれ、乾季はほとんど耕作されない。

カンボジアは、古くから周辺の強国による攻撃を受けており、全盛時代は六世紀―一二世紀(クメール時代)のひ

ところだけであった。

カンボジアの土地は、古くは王の個人的所有とされてきたが、フランス領となつてから、土地の私有権が認められるようになった。現在全農家の九〇パーセントは、五ヘクタール未満の小土地所有階級に属する。小作関係も少しはあるが、大部分のカンボジア農民は自作農である。しかし、農民の生活状態はきわめて低い。それは、宗教や華僑の搾取および農業技術・生産意欲や勤勉性の欠如に原因を求めることができらるであらう。

粳の生産高や人口は、政情の影響をうけているが、双方とも漸増の傾向を示している。

農業人口は、全国人口の七一パーセントに該当している。

一九四一年の粳生産量は、戦争や領土の問題、旧統計の過小評価などでわずか九五万トン、一九六六年は約二七三万トンに増加している。

人口も一九三九年には三一九万五〇〇〇人であったのが、一九六六年には六三二万人に増加している。

精米の生産量と人口との相関では、一九五六年においては、計算上余剰精米約五万トン程度であったが、一九六五年には五九万七七一二トンも余剰が生じるようになっていた。カンボジアは、自然灌漑が多いため、粳生産量の増減差が著しい特色があることも考慮しなければならない。単位収量では北西部沖積土の直播地域に収量が多く、南部の浮稲地域では少なくなっている。

地域別には一九五六年に東北周縁高原地域や丘陵地と、南部沖積地の人口集中地域の州において不足が認められたが、一九六六年には、南部の人口集中地域のみになっている。これは東北部等が粳の生産率が高くなったことを示すもので、精米量と人口との相関推移からみて、バツタンバン州・シエムレアップ州などは精米が増加し、カンダル州

やプレイビン州・コンボンチャム州では人口が増加していることがわかる。この傾向は、年度差により多少差異はあるが、一九五一年を基準とした籾生産の対人口増加率からも明白にわかる。

要するに歴史的にも東西文化の複合的性格の強いカンボジアは、古くより米の余剰国・輸出国であったが、地域的には恒常的な精米不足の州があり、これも歴史的発展過程にしたがって減少している。しかし、人口集中地域の州は今後も不足を示すであろう。

以上は米のみであるが、輸入小麦粉や外の農産物生産などを考慮して、カンボジア全体では強いアウトルキーを示し得る地域と判断され、国際的地位からも独自性を示す一つの要因にかぞえられるのである。本稿は一応の傾向把握であり先学の御叱責を賜りたい。

## 注

- ①② カンボジアの農林畜産業、外務省、経済局、アジア課、一～四頁、一九六三。
- ③ Thomas Fitzsimmons: CAMBODIA, Country Survey Series, editor, 1957.
- ④ 米倉二郎、カンボジア王国、新世界地理、4、東南アジア、一七六頁、一九五九。
- ⑤ 東南アジア政治経済総覧、上巻、アジア協会編、五四六頁のグラフによる、一九五七。
- ⑥ カンボジア王国便覧、外務省、アジア局編、四～五頁、一九六一。
- ⑦ Charles A. Fisher: South east Asia, A social, Economic and Political Geography, pp. 538～554, 1965.
- ⑧ Brush, McCune, Philbrick, Randall: The Pattern of Asia, Department Geography, The University of Chicago, p. 413, 1961.
- ⑨ 佐田弘治郎、仏領印度支那篇、南洋叢書、第二卷、東亜経済調査局、八七～八八頁、一九三七。
- ⑩ 高橋保、カンボジアにおける農業基本統計の改訂について、アジア経済、第六卷、第一号、五三頁、一九六五。

- ⑪ カンボジア技術調査団報告書、社団法人、カンボジア協会、七九〇八〇頁、一九五六。前掲⑩の五三頁の農家数の規模別構成表と州別にみた農家数の規模別構成比率表を参照した(原資料は Direction de l'Agriculture, Bulletin de la Statistique et des Etudes agricoles, Iere Année, No. 3, Octobre-Novembre-Décembre 1963, p. 50 及び David J. Steinberg: Cambodia, New Haven, 1959, p. 268. 元は Bulletin Economique de l'Indochine, avril-juin, 1952.)
- ⑫ 永田逸三郎編、カンボジア・ラオスの経済社会開発、アジア経済研究所、一〇七〜一〇九頁、一九六二。
- 兵庫農科大学、カンボジア学術調査報告、一、二、一九五八。(浮稲は四月末から五月初めに直播されて、その後雨季に入ってから一日に一〇センチメートル位の増水に従って茎が伸長し、減水後は倒伏し、二月から一月に収穫する特殊な品種)
- ⑬ 海外技術協力叢書、一、カンボジア編、海外技術協力事業団、三五頁、一九六二。
- ⑭ 世界年鑑、共同通信社、一九六〇。
- ⑮ 世界統計年鑑、国際連合、一九五二〜一九六七年版と、前掲④の統計から籾の生産量を求めた。一九六二年以降に新統計が発表され、全般的にその量が多くなっている。
- ⑯ 前掲⑬
- ⑰ David J. Steinberg: Cambodia, its People, its Society, its Culture, の統計より作成した分布図による、一九五七。
- ⑱ アジアの動向、アジア経済研究所、九四頁の統計より作成した分布図による、一九六六。
- ⑲ 世界統計年鑑、国際連合、一九五二〜一九六七年版、世界人口年鑑、国際連合、一九六〇。
- ⑳ ㉑ 前掲⑤の五四八頁の統計で作成した人口密度図による、一九五七。
- ㉒ Royane du Cambodge, Minis Tere Prelinaires' du Recensement General de la Population, 1962.
- ㉓ カンボジアの農林畜産業、外務省、経済局、アジア課、一九頁、一九六三。
- ㉔ 太田昇舜、ベトナムにおける稲作に関する一考察、人文地理、第一九卷、第三号、七六頁、一九六七。
- ㉕ 前掲⑤の統計による米の量と、前掲②の六五頁の人口統計の相関より作成した分布図による。
- ㉖ 前掲③の統計による人口増加率二・五パーセントとしての一九六六年推計人口と、前掲⑩の統計による籾生産との相関より作成した分布図による。
- ㉗ 前掲①

- ⑳ 世界統計年鑑、国際連合、一九五二～一九六七年版および前掲㉑と、前掲㉒の統計より算定。  
㉓ Keith Buchanan; Oasis of Cambodia, The Geographical Magazine, September, 1965.

付記

本稿は分析の都合上、過小評価であると言われている旧統計資料を使用した。一九六六年のみカンボジア農業統計局報告の新統計による予定量のため、その差が幾分大きくなっていることを付記しておく。